

光の子

有森信二

二年A組の竹内碧が妊娠しているという噂が、流れた。気を付けてみれば、華奢だった腹部が少し前にせり出し、足を引き摺る度合いも強くなった。

「間違いありませんね。五か月を越えています。まもなく、母胎の安定期に入ります」

「まだ辛いらしく、三日続けて早退しました」

保健の教師と担任の私が、職員会議で報告した。

「困りましたねえ、啓城高校始まって以来の問題事です。それにしても、事件が続きますねえ。この大事な時期に」

教頭が、頭を抱える。

「相手は誰でしょう」

「当の竹内自身、いつもと変わらず、あつげらかんとしています」

「授業中は、例の透き通りそうな瞳を向け、熱心に授業を聞いてくれます」

「まさか、ねんねじゃあるまいし。一年次のとき、特別に女子生徒向けに婦人科医を招いて、そちらの講演もしてもらっています」

「ねんねではありませんよ。彼女の詩、結構ストレートに表現しています。例えば『命は、光とともにあり。白い、目も眩まんばかりの光。光とともに命来たり。光とともに命去りゆく』とありますね。『白い光』と題する最新作のようです」

「うちの詩人たちにも、困ったもんですな」

「で、腹の子をどうするつもりだろう」

「産み、育てながら高校、大学に通うんだと言っています。これは本人から聞いた話ではありませんけれど」

竹内の家は、デパートを都心に経営しており、なんでも母親の違う兄弟が六人いるという。竹内は末っ子で、母親はミス啓城大だったらしい。

副担任で先輩の椿は、「松山だけど」と空咳を一つした。

松山は、文化祭の会場で、講師のノーベル物理学賞受賞者加賀美博士の顔にライトを照射し、「偽科学者は去れ」と叫んで荒れ、今は隔離棟に入れられている。

「松山は詩人であり、啓城高校に文芸部がないのを知ると、同好会を作った。同好会の呼びかけに、女の子たち七、八人が加わった。その中に、竹内碧もいた」

「足が悪いということ故、創造主は考えられ得る限り彼女を完璧なものにしたというのが、先生の口癖でしたよね」

「ああ。『やや傾ぎ加減の立ち姿。なにか遠いはるかな思いに導いてくれる、淡い光の中の少女』というのは、松山の『聖少女』という詩の一節だけど」

私もA組の授業中、竹内の瞳に見詰められているのに気が付き、次のフレーズを忘れてしまったことがあった。

足が悪いといつても、ほんの少し左足を引かず程度の、何気なく見ていると見落としてしまいそうなくらいであるが。しかし、なんといつても、十七歳の多感な少女である。

「竹内は次の号に、『青い光』と題する詩を発表しました。『遠く遙かなるものが存在するとすれば、いかにして、このように残酷で、絶望的な仕打ちをしでかすことができるのか』という言葉で始まり、『幾劫もの時空を束ねるのであるう遠く遙かなるもの。それは、どこまでも深く深く透け、どこまでも高く高く翔けりいく、ほのかな揺らぎにも似た青い光の』と続いていきます。これが、松山に強い自信を与えるきっかけになったというのが、職員室等でのもつぱらの話です。たかが生徒たちの詩ということだけで片付けるには、状況がかなり複雑過ぎますが」

「最も考えられる相手は松山だけど、彼はちょうど半年前に隔離棟に入ったんだが」

「竹内本人が、光の子なのよ、と言ひ張るらしいですから

ほら、マリア様のように。実に、前向きですよ彼女は」

「この学年は、いつになく、期待が大きかったせいか、話題もビッグだねえ」

「なんといつても、松山、竹内ら県内ビッグスリーの入学。これに沸きましたから」

「ここの子たち、多分おくるみで二重にも、三重にもくるまれて育ってきたのだろう」

「違うない、ですええ」

椿に言わせれば、生活感のなさということでは、学年中、竹内はまぎれもなく希有な存在であるという。松山もそうだった。今、そのうちの二人までが、間を置かず、大きく歩みを変えようとしている。

「ページを繰る要領で、扉をくぐり抜けさえすれば、アンドロメダ座大星雲にだって、オリオン座大星雲にだって、他の星雲にだって簡単に行き、戻ることができるんだ。ヒトの場合で言うなら、例えば、胎内から出たり入りたりするという方法が、その一つだよね」

私は席を立ち、窓辺に向かい目を閉じた。松山が隔離棟に入る二週間前に、学級日誌に残した言葉である。

閉じた目の奥に、松山の利発そうな白い面立ちと、竹内の透き通りそうな瞳の残像が、いよいよのつびきならぬ鮮明さで浮かび上がってきた。